

研究室の風景

矢野重信

人間文化研究科研究科長

平成17年度から始まった文部科学省の支援による「魅力ある大学院教育」イニシアティブにおいて、昨年度は社会生活環境学専攻を基盤とする「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」プロジェクトが選定され、今年平成18年度には、複合現象科学専攻を基盤とする「先端科学技術の芽を生み出す女性研究者の育成」が選定されました。今回の選定で、本研究科の4専攻のうち2専攻がその選定対象となりました。本研究科の取り組みが高く評価されたものとして、大変喜んでます。

他の2専攻においても、将来の採択を目指して魅力ある大学院教育に取り組んでいます。そのささやかな一例として、私の研究室の風景を紹介します。

共生自然科学専攻の機能性物質科学講座に属している私の研究室では「医療用糖鎖連結金属錯体のデザイン合成」、「光線学療法用い糖鎖連結光増感剤の開発」、「航空宇宙のためのナノ分子センサの開発」、「配位空間のナノ制御による光機能性金属クラスターの構築」等の研究を展開しています。幸いにも実験器具・装置もそれなりに整備できましたので、学生達はスムーズに研究を行うことができます。分からないことがあれば、我々スタッフ（矢野、小幡助手）がアドバイスをしますし、優しい先輩達も相談にのってくれます。こういった環境の中で、各自が毎日の実験の計画を立て、目標に向かって頑張っています。堅苦しい雰囲気ではなく、いつも笑いが飛び交う、明るく活発な空間です。

週1回全員参加のセミナーが開かれ、各自が自分の研究テーマに関連する英語の論文を読んで紹介します。また、月1回、Research Meetingがあり、研究の経過報告ならびに今後

の相談をいたします。この時には、建設的な議論を活発に行い、その後の研究に大いに役立っています。議論の場を設けることによって、各自の目的を再確認すると共に、自立力ならびに知識を養うことを目指しているのです。つまり、要点をまとめ、公の場で分かりやすく説明する力をつける訓練をしているのです。

写真は8月に開催された国際会議での英語によるプレゼンテーションの練習風景です。このように、本研究科の重大な教育課題である「国際性豊かで自立力に富む女性研究者の育成」に向けて、実践的な教育を行っています。

のびのびと楽しく研究ができる矢野研で、一緒に研究を試みませんか。



イニシアティブ関連新規開講科目の紹介

「女性研究者キャリア論」

宮坂靖子

生活環境学専攻助教授

本山方子

人間行動科学専攻助教授



本授業の目的は、将来、研究者というキャリアを形成するために必要な知識や情報を提供し、研究者となるためのステップに応じた課題を共に考えることです。

女性研究者としてのロールモデルが多いという本学のメリットを十分生かして、イニシアティブ領域のみならず、理科系の先生方も含めた多くの先生方をゲストスピーカーとして授業に招き、体験談を語っていただいたり、アドバイスをいただいたりしています。

また、大学院同士のグループワークを通して、研究者というキャリアを形成する過程における課題や問題点を話し合い、大学院生時代にいかに学び、いかに過ごすかというテーマに向き合っています。短い授業ではありますが、大学院生の皆さんのキャリアプランの設計に役立つことを願っています。

「女性研究者キャリア論」を受講して

宮澤知紗子

博士前期課程 人間環境学専攻1回生

研究の楽しさがわかってくるにつれて、私は研究者という職業に関心もちはじめましたが、具体的な研究者のイメージがつかみにくく、不安や心配もたくさんありました。しかし、今回「女性研究者キャリア論」を受講したことによって、その不安や心配は取り除かれたように思います。

大学における女性研究者の現状、先生方の経験を基にしたキャリア形成についてのアドバイス、博士後期課程での研究支援、学生による課題発見など、毎回多彩なテーマで非常に興味深く授業に参加できました。特に先生方の大学院時代から現在に至るまでのお話は、

研究の楽しさや悩み、結婚や育児という私生活にも踏み込んだ幅広い内容で、女性として生きる上でのロールモデルとして参考になりました。

「女性研究者キャリア論」という名称ではありますが、研究者としてだけでなく女性として“自分がどう生きていきたいか、どうなりたいか”を考えるきっかけを与えてくれた授業でした。自己実現するために、いまずべきことは何なのか、少しずつではありますが見えてきた気がします。

私の研究

「美容整形の歴史を探る」

佐藤碧子

博士前期課程 人間環境学専攻2回生

私の研究テーマは、近代日本の美容整形史です。美容整形は、現在医学的には「美容外科」という名称で呼ばれ、特にここ10数年間の需要の増加は目を見張るものがあります。プチ整形やしみ・皺取りの施術が登場し、対象は男性にも拡大されました。しかしその一方で、手術ミスという深刻な問題は多発しています。

私は、このような現状に直面し、美しくなるために自身の顔や肉体にメス（針）を入れる行為が、なぜ、またどのようにして日本で誕生したのか、その「起源」に強く興味を惹かれました。そこで、日本の美容整形が誕生した近代という時代に焦点を当て、当時の美

容整形の様相やその背景等について探ることにしたのです。

現段階では、医学雑誌や婦人雑誌、新聞等の史料を収集し、それら史料や関連する文献を読み込み、分析・考察を行なっています。研究を進める上では、指導教官からのアドバイスや同輩からの何気ない一言により新たな視点が生まれます。美容整形という事象が近代日本の大きな歩みと密接に関連していたことも見えてきました。個々の史料を繰り返し読むという地道な作業の継続が美容整形の新たな側面を導き出すことに繋がると信じ、日々研究に励んでいます。

イニシアティブ関連新規開講科目の紹介

「学術交流英語」

杉峰英憲

社会生活環境学専攻教授

研究マネジメント群にある学術交流英語は、国際学会での発表や質疑応答、あるいは共同研究や研究者としての対話等を想定し、学術的な交流への方法やスタンス、そして学術的な対話のセンスを身につけることを目的としたものです。第1回目の5月27日には、受講希望者が、それぞれの学問的立場から、生活環境の課題を発掘し、それらをどのように解決していくのかという提案をA4一枚に日本

語でまとめて持ち寄り、全員で討議し、英語による話題提供のコンテキストに改変しました。第2回目の6月3日には、ATRの主任研究員であるキャンベル氏を迎え、英語による発表と質疑応答を行いました。かなり過酷な7コマでしたが、受講者は、エビデンスを如何にして反証可能性のある論理構成に乗せるかということが、特に英語による学術交流には要となることに気づいたようです。

「学術交流英語」を受講して

座主果林

博士後期課程 社会生活環境学専攻1回生

今回、特に印象に残ったのは、英語で自らが発見した「生活環境の課題」をまとめていくという作業でした。日本語をそのまま訳すのではなく、英語として伝わることを意識するようアドバイスをいただきました。そこで、いったん日本語で考えをまとめた上で、改めて「どのように書けば伝わるのか」を英語で考えながら書いてみました。主張したい点をよりはっきりさせ、論理が明快になるように書いていくことで、自分がしっかり考えていなかった点に気づくなど、作業は大変でしたがとても有意義でした。できあがってみると、構成も文章もはじめに日本語で書いたものとはかなり違ったものに

なっていました。英語で書く作業を通じて、課題をより多様な観点から考えることができ、理解も深まったように思います。

この授業を通じて、英語で表現しコミュニケーションできる力をつけることは、取り組む課題をさまざまな角度から考えるためにも重要だと感じました。まだまだ難しいことばかりですが、これを機会にこれからも続けて挑戦していきたいと考えています。

最後になりましたが、先生方、ほかの受講生の皆さん、本当にありがとうございました。

私の研究

「中国東北地方の朝鮮族家族の現代の変容 —家族の規範、中国の国家政策及びグローバル化との関連から—」

張 英花

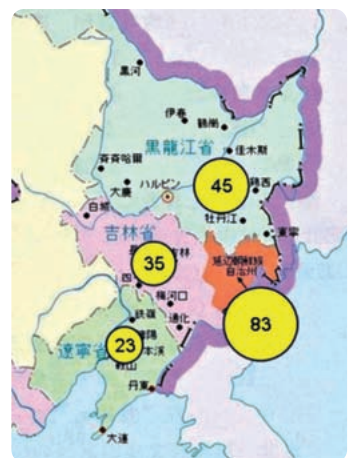
博士後期課程 社会生活環境学専攻3回生

1980年代後半からのグローバル化の中で、中国は、特に政治と経済において大きな転換の道筋を選択するようになりました。しかしながら、周辺地域の諸民族は、そうした現代社会の変動に適応していく過程において、伝統的な習俗文化を継承していくことが難しい現実に置かれることがあり、自文化の生成と変容が課題となってきています。

現在、私が執筆中の博士論文の目的は、1949年の中華人民共和国の成立から今日に至るまでの50年の間、特に中国政府の一連の制度的転換や市場経済化に伴う1992年の『中韓国交』の樹立以降、中国の東北地方に居住している朝鮮民族の伝統的な家族の規範が、近現代社会に適応していく過程で、中国の国家政策及び経済のグローバル化とどのように関わっているかを明らかにすることにあります。

具体的な内容は、朝鮮族家族の祖先祭祀、家族形態及び親扶養の形態の変容に焦点をおき、主に事例調査に基づいて分析を行っています。

調査は、中国東北の都市近郊農村と遠隔地農村の朝鮮族集落での長期的な現地調査と、また、近年、大量の朝鮮族が韓国に渡っているため、それらの朝鮮族に対するインタビュー調査も2年間実施しました。



中国朝鮮族の居住地域と人口
注) 1990年における人口(単位:万人)



今回のセミナーの目的は、立教大学教授の奥村隆先生を講師にお迎えし、社会学を行なうすべての人に関係する大きな問いとして、「社会学的なもの」「社会学をすること」との内実を議論することでした。この重要な問題について集中的に議論することは、今後の研究活動の基盤となる、非常に有益で必要不可欠な機会となります。

当日は、奥村先生ご自身の著書『他者という技法』以後の思考の変遷を辿りながら、「社会学はどうであったか」「社会学の可能性」についての議論に真正面から取り組む密度の濃い講演でした。2時間におよぶ講演のあとの質疑応答では、フロアの院生や教員からの

大学院生の自主企画研究セミナーⅠ 「〈現代社会への視点〉社会的なもの和社会学的なもの —『他者という技法』以後—」

村田賀依子

博士後期課程 社会生活環境学専攻2回生

意見・質問と講師からの丁寧な返答による議論が活発に行なわれ、セミナーは予定時間を大幅に超え充実したものとなりました。

第一線で活躍する研究者との交流の機会が得られたことは、社会学分野の研究者を目指す各院生にとって、またとない刺激になったことと思います。

日 時：2006年2月27日（月）14：00～ 於：本学N棟320-3教室

参加者：講演者1名、本学教員8名、本学院生・学部生21名、学外3名、計33名



京都大学大学院人間・環境学研究科助教授の浅野耕太先生をお迎えし、標記のテーマでセミナーを実施しました。今日では環境保全のために何らかの対策を施すことが必要な場合が多々あるにもかかわらず、仮に対策を実施したら経済的にどの程度のベネフィットがあるかについては、他の公共事業に比べてわかりにくいという特徴があります。そのような特徴を持つ環境保全対策に対して、社会的な理解を得るための工夫はないのだろうか、という疑問を質すのが本セミナーの目的でした。この疑問に対し、講演者は自治体の依頼により環境評価に関わった具体的事例（大阪府によるため池の整備に関するケースなど）を採り上げながら、GISを利用したトラベル

大学院生の自主企画研究セミナーⅡ 「環境政策と環境評価」

水野和代

博士前期課程 人間環境学専攻2回生

コスト法による環境評価をはじめ、様々な方法について解説されました。

「目に見えない価値」を金額として表す「一環境評価」という手順を踏むことを通じて、経済と環境の両立を探る途のあることが示されました。講演後には活発な質疑応答もなされ、有意義なセミナーとなりました。

日 時：2005年12月27日（火）15：00～ 於：本学E棟307会議室

参加者：講演者1名、本学教員1名、本学院生・学部生7名、学外1名、計10名

そのほかの 取組み

「シルクロードのひとびと～新疆ウイグルにおけるオアシスの生活と文化～」

日 時：2006年9月30日（土）13：00～17：00

場 所：奈良女子大学・大集会室（学生会館2階）

参加無料：申し込み不要

講演者：堀 直（甲南大学文学部教授・中央アジア史）／中川裕美（民族衣装研究家）—衣裳展示付き—

企画者：古澤 文（人間文化研究科博士前期課程 国際社会文化学専攻地域環境学コース）

鷲尾惟子（人間文化研究科博士前期課程 国際社会文化学専攻地域環境学コース）—ピアノ実演奏付き—

「ドイツの創造的都市縮小政策」

日 時：2006年10月28日（土）13：30～

会 場：生活環境学部 中会議室

講 師：坂本英之（金沢美術工芸大学教授）

企画者：日高香織（人間文化研究科博士前期課程 人間環境学専攻）

「モンゴル民族の暮らし～モンゴル遊牧の特徴と現状～」(研究プロジェクト演習)

日 時：2006年10月29日（日）14：00～17：00

場 所：人間文化研究科会議室（F棟5階）

講 師：小長谷由紀（国立民俗学博物館総合研究大学院大学 教授）

企画者：「研究プロジェクト演習」受講生（5名）